

健康通信

インフルエンザ

やってきました、この季節。今回は「インフルエンザ」の巻

インフルエンザ

インフルエンザウイルスの感染により、高熱・咳・全身の関節痛や筋肉痛などの症状が出ます。ウイルスは毎年少しずつ変異し、冬から春先にかけて流行します。非常に感染力が強く（発症の1日前から感染性があり、発症24時間程度が最も感染性が高い）、仕事や学校を休む必要があります。

感染経路は？

咳やくしゃみの飛沫による感染が主ですが、接触感染も珍しくありません。

致死的合併症

肺炎や脳症など、生命に危険のある重篤な合併症が発生します。最近、特に小児の脳症が問題視されています。年度によって、100人くらいの小児が脳症で死亡し、後遺症患者も多数出ていると推測されています。

～Q&A～

●インフルエンザの予防は？

最も予防効果が高いのはワクチンの接種です。予防接種によりインフルエンザに罹患しにくくなり、たとえ罹患しても症状の重症化を抑えることができます。その結果、合併症や死亡の危険性を抑制できます。もちろん、うがいや手洗い励行です。また、インフルエンザが疑わしい人には、マスクをしてもらうことが大切です。

●特にワクチン接種を推奨される人は？

①高齢者、②基礎疾患者：喘息など呼吸器疾患や心臓病など、③小児（幼稚園や小学校など集団生活者）、④医療従事者や不特定多数が出入りする職場環境にお勤めの方など

●予防接種の効果は？

効果発現まで2週間程度、その後、抗体は約5ヵ月間持続します。

●予防接種の回数・時期は？

13歳以上は、1回の接種で十分効果があります。

13歳未満は、原則2回です。2回接種の場合、より高い免疫効果を望むため1回目から3～4週おいての2回目を接種が勧められます。10～12月のインフルエンザ流行シーズン前に接種します。

●授乳中ですが、問題ありませんか？

はい、問題ありません。不活化ワクチン（病原性をなくした成分のみ使用）なので、ワクチンに感染性はなく、乳児への影響はありません。

●注意点は？

①37.5℃以上の発熱者 ②ワクチンによるアナフィラキシー経験者や全身性発疹等アレルギー症状 ③免疫不全、妊娠初期、生後6ヵ月未満など。

●それでは卵アレルギーは？

要注意者に該当します。インフルエンザワクチンにはごく微量ですが卵の成分が含まれています。従って、生卵を食べて、蕁麻疹や発疹、アナフィラキシーなどの重度の卵白アレルギーの方は、慎重に判断します。

院長 佐々木 英彦

●職歴

平成2年 仙台社会保険病院 内科初期研修
平成4年 公立深谷病院 循環器科
平成7年 仙台厚生病院心臓センター 循環器科
平成8年 宮城県立循環器・呼吸器病センター 循環器科
平成11年 同循環器科部長
平成19年 エアリ内科・循環器科 開院

●所属学会

日本内科学会
日本循環器科学会
日本超音波医学会
日本心血管インターベンション学会

●専門分野

高血圧、心臓病、動脈硬化
超音波医学（基礎、臨床）
心血管インターベンション（カテーテル治療）

ご相談・お問い合わせ ☎ 022-797-8601